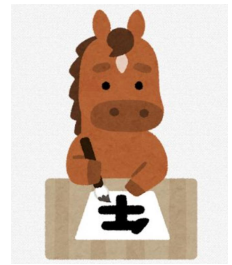


競馬🐎の世界に見る国際化



今年は午（うま）年ですね。

というわけで今回のコラムは、お馬さんの話題を取り上げてみたいと思います。

皆さん、日曜劇場「ザ・ロイヤルファミリー」のテレビ放送はご覧になりましたか？競馬の世界を舞台に、夢を追い続けた大人たちの熱きヒューマンドラマです。令和7年10月から12月まで放送され、ある調査では、民放全連続ドラマの年間視聴率ランキングで3位に入ったというデータもありました。

このドラマが最終回を迎えた後、現実の競馬の世界で開催された年末の大レース「有馬記念」では、投票券の売上が前年比130%になったそうです。放送の影響であるという見方が強いそうで、ドラマの力はすごいものですね。

ここで現実の競馬の話になりますが、このドラマに出てくる競走馬「ロイヤルファミリー」が、最終回で制することになった「凱旋門賞」というレースがあります。このレースは競馬発祥の地、欧州フランスの競馬場で毎年開催されるもので、世界最高峰の「芝」レースであると言われています。実は日本の競走馬は、このレースで勝利したことがありません。

いま「芝」レースと言いましたが、もう1つ。競馬には「ダート（砂、土）」レースがあります。これは、伝統的にアメリカで盛んとなっており、ダートの世界最高峰レースに「ブリーダーズカップ・クラシック」というものがあります。日本の競走馬にとって、こちらは前述の凱旋門賞よりも勝つことが難しく、今後日本馬がこのレースで勝利することはない、とまで考えられてきました。

しかし、そのレースを令和7年に制覇した日本馬がいます。その馬の名は「フォーエバーヤング」。競走馬としてデビューして間もない頃から日本を飛び出し、海外のレースを積極的に転戦し続け、当該レース2回目の挑戦で、ついに世界最高峰のダートレースを制したのです。個人的にこれは、日本人の大谷翔平選手が、メジャーリーグでホームラン王の座を掴むことと同じレベルの衝撃でした。

一昔前まで、日本の競走馬は世界に出ると全く通用しませんでした。逆に、世界の競走馬が日本の交流レースを席卷していた時代もあります。そのため主催のJRAが、海外で生産された競走馬を、日本のグレードが高いレースに出走できないよう制限をかけたりして、欧米の競走馬に比べて見劣りする国内競走馬を保護する施策をとっていました。そもそも、日本の競走馬が海外のレースに出走することは人馬とも非常にハードです。神経質な競走馬を輸送するリスク、コスト、それに関わる調教師や助手、騎手の問題など、単に賞金を稼ぐという意味では、ナンセンスだという考え方もあったようです。

それでも、「ザ・ロイヤルファミリー」に出てくる登場人物たちと同じように、世界の競馬に追いつけ追い越せとチャレンジする熱き思いを持ったホースマンが次々に現れました。世界で戦うために何が必要か？を常に考え、世界で通用する血統、調教・騎乗技術、現地での馬体調整など、国際的な戦い方を試行錯誤していったのです。その後長い時間をかけ、少しずつ日本の競馬がレベルアップし、それに呼応するかのようにJRAも鎖国路線から開放路線へと舵を切りました。そうして少しずつ海外の主要レースでも日本馬が結果を残せるようになり、ついにフォーエバーヤングが、世界最高峰のダートレースでその実を結んだのです。

この話は、我々日本人の雇用環境でも同じです。近年、企業のグローバル化が進んでいく中で、日本企業は国際市場で戦うための人材戦略を考えなければなりません。そういう企業であればあるほど、外国人との言語の違いなどは些末なことで、いかに柔軟な発想で能力を発揮できる人材を確保できるかを考えますので、外国人の雇用率が上がっていくことは当然の流れと言えます。また、日本人の従業員も、外国人と共に働くことにより新しい考え方や価値創造ができるようになり、切磋琢磨してレベルアップし、国際的に戦える人材へと成長できるのだと思います。

鎖国のような考え方で、似た者の集まりでものごとを進めるという考え方を否定するわけではありませんが、異なる価値観や文化を持つ人と協力したり競争をして共に成長するということは、もはや競馬の世界でも、スポーツの世界でも、企業活動においても、避けては通れない時代ではないかと思います。

さて、競走馬フォーエバーヤングは、この2月にサウジアラビアで開催される「サウジカップ」に出走する予定です。このレースは世界最高賞金競走（1着賞金、約15億円）です。皆さん、応援してあげてくださいね。

徳さん

